

北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』（仮題）
 （北海道大学出版会，2006年4月刊行予定，352頁，予価6500円＋税）

中田 篤

北海道立北方民族博物館は、1991年の開館以降、日本における北方文化研究の拠点となるべく活動してきた。本書は、北方民族博物館におけるこれまでの研究活動の成果を広く一般に知ってもらうことを目的に発刊されたものである。北方民族博物館の研究活動には二つの柱がある。一つは国際シンポジウムであり、もう一方は研究紀要である。毎年開催される「北方民族文化シンポジウム」では、内外の研究者を招き、各回ごとに設定したテーマに沿って議論が展開される。博物館の開館前に網走市によって開催されていた時期から通算すると、このシンポジウムは昨年秋に20回目を迎えた。その成果は、毎年報告書『北方民族文化シンポジウム報告』として刊行されている。また、博物館の開館と同時に創刊された『北海道立北方民族博物館研究紀要』は、博物館学芸員による研究成果の報告と外部研究者からの投稿論文によって構成されている。こちらも年に1号ずつ刊行され、今年度で15号を数える。

本書は、これら二誌に掲載された論文を中心に、数本の書き下ろし論文を加えて構成されている。それぞれ20年、15年の間に二つの定期刊行物に掲載された論文数は膨大な数に上る。そのため、本書では、広大な北方空間のなかから「環北太平洋圏」に地域を絞り（実際は少しはみ出しているが）、「文化」と「環境」をキーワードとして編集されることになった。

本書は、第Ⅰ部「環北太平洋圏の自然と文化」、第Ⅱ部「北ユーラシア」、第Ⅲ部「北アメリカ」の三部構成となっている。第Ⅰ部は、やや長めの論文3編から構成されている。海洋の生態系、海獣狩猟に関わる先史文化、毛皮革の利用と加工に関する民族文化とテーマは異なるが、環北太平洋圏全体に関わる論考であり、本書全体の文化と環境の共通基盤を知る上でも重要な部分である。

第Ⅱ部「北ユーラシア」は、さらに第1章「北ユーラシア内陸部」と第2章「北ユーラシア東岸—沿海地方、北海道からカムチャツカ」から成る。第1章の中心テーマは、おもに内陸地域で発展したトナカイ飼育である。対象地域はシベリア全土からモンゴルに及ぶが、トナカイ飼育と海岸の海獣狩猟を連続的・互換的なものととらえるグループニック論文によって、この地域も環北太平洋圏に結びつけられている。第2章は、テーマ的には、失われつつある先住民の言語復興、歌や踊りといった芸能文化の共通性、先住民社会の伝統的生業と日本人との関わりなど、バラエティーに富んでいるが、ロシア沿海地方、そして北海道からカムチャツカ半島に至る、まさに北太平洋の沿岸地域が対象地域となっている。

第Ⅲ部「北アメリカ」も、第1章「北アメリカ西岸—アラスカからカナダ」と第2章「カナダ北東部」の二章立てである。第1章では、アラスカからカナダの北西海岸地域に至る地域を対象に、考古学的手法による先史文化の再構成、歴史的資料による先住民文化の変遷の検証、そして先住民の漁業をめぐる現代的な課題の現状と、それぞれ異なる時間軸そして研究方法によって、先住民文化の異なる側面に光を当てている。第2章では、もっとも北方の環境に適応したとされるイヌイトを対象に、彼らの現代の生活に地理的認識能力や食物の分配方法などの伝統的な文化要素が依然として息づいていること、その一方で伝統的な生業活動や食生活において大きな文化変容がみられたことが取り上げられている。

第Ⅱ部、第Ⅲ部には、それぞれ「資料紹介」という小論が添えられている。北方民族博物館

の所蔵資料のうち、それぞれ北ユーラシア、北アメリカに関係の深いものを学芸員が紹介したものである。おもに物質文化を扱う博物館が編集した論集として、本書を特徴づけるものとなっている。

以上、ごく簡単に本書の内容を紹介した。本書は、系統立って書かれたものではないので、統一感に欠ける点もあるし、対象とした地域や民族に偏りがあることも否めない。しかし、逆に考えれば、環北太平洋圏の文化を対象としながら、これだけ多様な問題意識とアプローチの研究があるということを示しているとも言える。このことによって、読者には、北方文化研究の広がりや可能性を実感してもらえないだろうか。

本書の企画は、かつて本学会の会長を務められ、北方民族博物館の前館長でもあった岡田宏明氏と前本学会会長の岡田淳子氏の提案から生まれたものだった。両氏から北方民族博物館の研究活動を支援したいという申し出があり、その支援の一部が研究成果の公表という形で本書を世に送り出すことになったのである。岡田宏明氏は、北方文化研究が若い研究者に受け継がれていくことを願っておられた。出来上がった本書をお見せすることができなかったのは残念だが、本書が北方文化研究を志す少しでも多くの方に読まれ、刺激や感動を与え、研究の裾野を広げてくれれば、きっと喜んでくださるに違いない。

内 容

[序論] 谷本一之「北方諸民族の生活と文化—北方民族文化シンポジウムと北方文化研究—」

[第Ⅰ部 環北太平洋圏の自然と文化] ミルトン・フリーマン「北太平洋圏の生態学」／ウィリアム・ワークマン「先史期における北太平洋沿岸地域の海獣狩猟」／齋藤玲子「極北地域における毛皮革の利用と技術」

[第Ⅱ部 北ユーラシア] 〈第1章 北ユーラシア内陸部〉イーゴリ・クループニック「シベリア諸民族の遊動生活の類型化—伝統的な様式と近代の変容」／中田篤「タイガのトナカイ牧畜—ツァータンによる秋季の日周放牧活動について」／佐々木史郎「北方ユーラシアのツンドラ地帯におけるトナカイ多頭飼育の2つの様相—ネネツとチュクチの比較」 〈第2章 北ユーラシア東岸—沿海地方、北海道からカムチャツカ〉津曲敏郎「話者による危機言語の記録とその活用—ウデへ語絵本作りをとおして」／甲地利恵「北方諸民族の声の彩り—アイヌ音楽から考える」／大島稔「カムチャツカ半島コリヤークの伝統的生業・トナカイ遊牧の変遷」／渡部裕「カムチャツカにおける漁業と先住民文化—日本人の果たした役割」／[資料紹介] 笹倉いる美「コリヤークのガーディアンとチャーム」

[第Ⅲ部 北アメリカ] 〈第1章 北アメリカ西岸—アラスカからカナダ〉岡田宏明・岡田淳子「ポート・モラー—気候条件と生態環境を克服した人びと」／岩崎まさみ「サケをめぐる混沌—カナダ北西海岸先住民のサケ漁」／岡庭義行「「私たちの文化」の生まれるとき—アラスカ・チムシアンにおける文化の持続・再生・開発」 〈第2章 カナダ北東部〉大村敬一「物語のタペストリー—地図とナビゲーションにみるイヌイトの環境観」／岸上伸啓「イヌイトの食物分配に関する覚え書き—カナダ国ケベック州アクリヴィク村の事例を中心に」／スチュアート ヘンリ「定住と生業—ネツリック・イヌイトの伝統的生業活動と食生活に見る継承と変化」／[資料紹介] 角達之助「明治大学寄託アラスカ収集の銚頭類について」

(なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館)